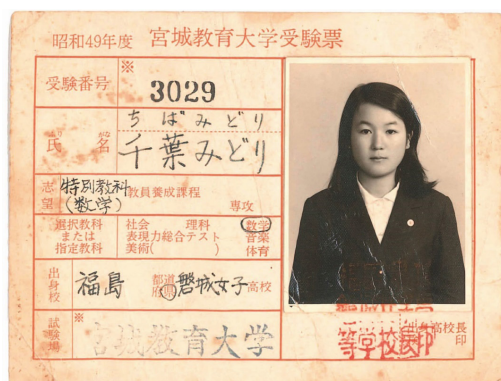


高校生のときは 将来の姿を想像できなかつた私

この教科書の3章の著者 香西みどり



高校生のころの私



現在の私

写真は、高校3年のときの大学受験票。当時、国立大学には一期校と二期校があり、3月初旬に一期校、下旬に二期校の試験、その間に一期校の合格発表があるというシステムでした。1974年3月3日に一期校の受験をし、3月16日に合格の電報を受け取り、二期校は受験しなかったために手元にその受験票が残ったというわけです。同じ写真を張り付けた二枚の受験票を書き、一期校は家政学部食料学学科、二期校は教員養成課程の特別教科数学、という不思議な組み合わせでした。もし、一期校を落ちていたら当然二期校を受け、数学の先生になっていた可能性が限りなく高いのですが、当時は自分の将来像が見えずというかどちらでもよかったのかもしれない。大学では家庭科の教員免許を取り、卒業後は中学高校の家庭科の非常勤講師から始まって、短大、4年制大学で食物を教え、大学教員生活を終えました。振り返ると食物一直線のように見えますが、その入り口をくぐるときは予想もできなかったことです。

人生何が起こるかわからないし、何が起ってもいいともいえますが、私の場合は自分の将来を本気で考えるようになったのは学部を卒業したあと食品関係の会社に就職した後でした。大学受験の際にほとんど意識していなかった自分の将来像にいやでも向き合わなければならない時期が来たのです。人によってその時期がいつ来るかはいろいろでしょうし、自分にしかわからない悩みだと思います。もし、そんなとき固まってしまったら、意識して柔軟に考えるようにするとよいかと思います。答えは一つとは限らないし、軌道修正もあり... そう、考えることは自由なのでその中から自分にあった答えを選ぶ、人生いろいろだ、と。砂時計の砂が下に落ちる時は一粒ずつしか通れないし、粒の大きさにあった隙間をくぐって広いところに出ます。10代から20代の若い季節は、人生に何回か訪れるであろう砂時計の砂が上から下へ落ちるようなタイミングをどこかで経験すると思います。将来の姿を想像できなかつた高校3年の私が50年後の今思うのは、その時々自分の心の声をちゃんと聴く、聴いてから行動することがそのタイミングにはまることなのかなということです。心の声を聴きのがさないように意識する、これは一生ものですね。